

北十間川の起源は運河

北十間川は江戸時代に開削された運河のひとつで、明治に入り現在の東京スカイツリー付近に吾妻橋駅が開業し鉄道貨物の取り扱いが始まると、鉄道貨物と連携した舟運が行なわれるようになった。北十間川は地域の物流インフラとして、城東地域発展の一端を担うようになったのである。しかし、戦後、物流の中心はトラックに移り、舟運は次第に衰退。接続河川の埋め立てが進んだことも重なり、北十間川の物流インフラとしての役割は終わりを告げた。

“すみだ”の河川は重要な観光資源

水辺を重要な観光資源と位置づけ、活かす取り組みが進められている。墨田区役所を訪ねた。「東京スカイツリーに隣接して流れている北十間川を、タワー観光のシンボリックな親水空間として整備することにしました」と産業観光部の中山参事。墨田区では北十間川はじめ、区内を流れる河川に観光船を運航し、東京スカイツリー周辺と区内各地、さらにお台場や羽田空港を結ぶネットワークを構想しているという。

魅力的な水辺をつくる

「水辺と周辺地域が一体となるような魅力的な空間を作ることを目指しました。北十間川では東京都が護岸の整備を進めていましたが、墨田区では東京スカイツリーの建設が決まったことを受け、都の整備に合わせて護岸の意匠性を高める工事を行なうことにしました」と都市整備部道路公園課の石原主査。さらに、石原主査は「今回の整備では、水質も考慮し東京スカイツリー付近にエアレーション（噴水）や木炭浄化施設も設置しました」と水質維持にも工夫を凝らしていることも説明。「周辺には、ハゼやテナガエビも戻ってきています」と語るのは環境保全課の山田主事。都会の真ん中の最新スポットのすぐそばに、水辺の生き物が戻ってきていることに驚いた。

北十間川に沿って歩く

隅田区役所からスカイツリー方面に向け、北十間川に沿って歩くことにした。隅田川から東に向かって最初にかかる橋は枕橋。周辺には屋形船も係留されている。川に沿って東武伊勢崎線の高架が通っているが、この高架下を賑わいのある空間にすることが構想されている。源森橋、小梅橋と進むと堰がある。実はこの堰、船の行き来ができない構造になっている。理由はこの堰を境に北十間川の水位が東西で異なるからだ。墨田区ではこの堰を可動堰にし、隅田川からも直接、船でスカイツリーの下に入ることができるようにすることを目指している。

水辺空間を知ってもらうことが課題

都会の真ん中を流れる北十間川。東京スカイツリーの建設をきっかけに、大きく生まれ変わろうとしている。しかし、課題はまだある。区では観光船を活用した観光ルートを企画したり水辺環境の整備をしたりしたが、まだ十分に周知され活用されている状況ではないという。どうすれば区民や観光客に積極的に活用してもらうことができるのか。模索が続いている。



写真左より、北十間川の東の端にあたる旧中川との合流点、スカイツリーの真下にある水質浄化のためのエアレーション（噴水）、小梅橋東側にある堰